

## 俳優の柳生博さん、四国の魅力づくりを語る！

3月9日(日)、高松市内で「四国21世紀の道ビジョン『四国の魅力を活かす道づくり』シンポジウム」が開催されました。

俳優の柳生博さんが「森と暮らす・森に学ぶ - ふるさとの魅力づくり」と題した特別講演を行ったほか、四国内の地域づくり事例も紹介され、約250人の参加者が熱心に耳を傾けました。

柳生博さんは、ご自身も27年前に山梨県の八ヶ岳南麓に移り住まれ、里山づくりや人の集まる魅力づくりに取り組まれています。短時間の講演でしたが、新四国のみちの取組にも参考になる多くの示唆をいただきましたので概要を紹介いたします。

なお、シンポジウムの概要は、3月27日(木)の徳島新聞、四国新聞、愛媛新聞、高知新聞に全面掲載されました。



### 柳生博さんの講演内容（概要）

#### 里山とは

- ・里山とは、田んぼ、あぜ道、小川、雑木林、家々があり、日本人が自然と折り合いをつけながらつくってきた風景。2千年前から変わらず日本人の命をつないできた持続可能な社会。
- ・世界中で日本人だけが虫の声が聞こえる距離感でたくさんの種類の生き物と一緒に暮らしてきた。それがまさに里山であり、里山は日本にしかない美しい風景。

#### 歩く道沿いを里山の風景に

- ・香川県は全県里山みたいなところだが、竹が年々増えており心が痛む。数年後には山全体が竹に覆われて素晴らしい雑木がダメになる。里山を守るには竹を使うか、切って捨てること。
- ・全国の森では杉やヒノキ、カラ松も問題。経済成長を目指して縦軸に銭、横軸に経済で生きてきて、雑木林を切ってしまった。せめて道路沿いだけでももとの雑木林に復元すべき。
- ・春になると花が咲き、田おこしが始まり、コウノトリがやってくる里山の風景を取り戻したい。
- ・里山の中の歩きたくないような道を掘り起こして光を当てたい。里山の美しい風景をつないでいく古い道がきっとある。今は途切れ途切れだが、それがつながっていけばどんなに素晴らしいだろう。

#### 八ヶ岳での取組

- ・八ヶ岳に移り住んだのは、中学の感受性の豊かな時に1ヶ月間八ヶ岳を旅して、森の中で植物や昆虫、宇宙、神様などたくさんのことを学び、感じたから。
- ・八ヶ岳では、荒れ果てた人工林を雑木林に戻そうと何種類もの木を植えてきた。植える木はもともとそこに生えていた木だけ。よそから植物や生き物を持ってきては絶対にダメ。
- ・森に入ること自然に道もできる。自分はそうやって道をつくってきた。自分の森では鉄道の枕木を敷き詰めて歩道をつくっている。
- ・地方に住む人にとって車は大事で、車で快適な道はあって当たり前。道づくりで本当に大事なものは車を止めてから先の歩く道で、そこからが住民の仕事。住民だけでなく、よそから来た新住民の違った視点や価値観も大事。

これからの四国は何で生きるか

- ・四国はコンパクトで日本の心が凝縮された場所。それが四国の財産。自分が八ヶ岳を旅して学んだように若者が遍路道を歩いている感じたら、きっと四国にたくさん移り住むだろう。
- ・遍路道を何度か歩いたが、道が悪い。四国に来て何かを感じようという旅人をダンプカーと一緒に歩かせてはダメ。
- ・歩く道をつくろう。鳥も虫もない杉林、竹林でなく、美しい雑木林の中を歩ける道を。きつかつての遍路道もそのような道だったのだろう。まずは遍路道から再生していこう。
- ・先人たちが命をつなぎ、今の自分たちやあらゆる生き物たちが生きている風景を美しく輝かせること、その自然の中で人々が何かに取り組んでいる姿を見てもらうこと。そうすることで全国からたくさんの方が四国を訪れるようになるだろう。

## 徳島県神山地区において第2回石積みボランティアを開催

徳島県神山地区において、2月22日(土)に第2回石積みボランティアが開催されました。これはへんろみちの修復が必要な箇所について、ボランティアで修復を行い、石積みの技術者の育成と愛着のもてる道づくりを目指すものです。

今回は焼山寺近くの通称「遍路ころがし」と呼ばれる急坂のある地点の2箇所において修復が行われました。参加者は地元住民や、町関係者のほか、徳島大学の学生ボランティアを含め総勢21名。地元の石積みエキスパートを講師に迎え、崩れた道に石積みをしたり、急斜面に石を階段状に敷き詰めたりしました。

慣れない作業で、最初は右往左往していましたが、最後は一致団結して見事に石積みの修復を完成させることができました。参加者からは次回も是非参加したいなど積極的な意見が聞かれ有意義なものとなりました。この修復された道をお遍路さんが安全に歩いてもらえると思うとなんだか癒しの心がわかったような気がしました。



## 愛媛県卯之町地区で整備計画を策定

愛媛県卯之町地区で、本年度3回目の整備推進協議会が2月12日(水)に開催され、卯之町地区の整備計画が決定されました。今回の協議会には、卯之町地区の整備計画の最終のとりまとめを行うために、推進協議会会長である宇和町長を始め6名の委員の方が出席されました。

今までに開催された協議会で出された意見等を集約した整備計画の最終案について、事務局より説明を行い、全会一致で承認されました。また、盛り込まれたハード整備計画やソフト施策等の内容に対して、ボランティアによる遍路道の補修やウォーキングイベントの実施など、地区で対応できるものは積極的に実施して行くことなどの意見が出されました。

今後、決定された整備計画を基に、住民と行政が一緒になって「新四国のみち」のハード・ソフト整備を進めていくこととなります。

大洲工事事務所「新四国のみち」卯之町地区アドレス

<http://www.skr.mlit.go.jp/oozu/michinavi/index.html>

## 愛媛県砥部地区で砥部焼まつりを開催

愛媛県砥部地区では、今回で20回目を迎える「砥部焼まつり」が4月19日(土)・20日(日)(9時～18時)に今年も盛大に開催されます。

このまつりは、約100軒の窯元が勢ぞろいし、皿・茶碗などの生活食器から花瓶などの美術工芸品まで15万点を一堂に集めた砥部焼大即売会を中心に、陶工の意欲作を集めた砥部焼新作展や、歴史的に優れた作品を展示する砥部焼歴史展で砥部焼の全てを紹介します。また、物産即売会、ろくろチャレンジコーナー、砥部焼チャリティーオークションや、著名人が揮毫した作品展、さらに「砥部焼の里ルート」内に設置した6カ所のポイントを回るスタンプラリーなどもあり、多彩に繰り広げられます。なお、スタンプラリーは全てのポイントを回った方に素敵な記念品が贈呈されます。

今年、砥部焼まつり20回記念として、砥部焼大即売会場で買い上げ5千円毎に商品券が当たる大抽選会や、結婚20周年を迎える磁器婚夫婦を募集し、20組に砥部焼をプレゼントするといった記念イベントも開催されます。



## 高知県安芸地区が散策ルートガイドマップを作成

高知県安芸地区では、「童謡の里 くつを鳴らして 歩かんかえ」をキャッチフレーズに、ごめん・なはり線安芸駅を起点に、岩崎弥太郎生家や野良時計、土居廓中、内原野公園などを巡る16kmのモデルルートを決定。モデルルートを含むルートガイドマップ「『みちくさ』を楽しもう 散策ルートガイドマップ」を作成しました。

安芸市は、大正・昭和の代表的な作曲家・弘田龍太郎のふるさとで、数々の童謡を生み出した背景となる歴史と文化の香る町です。ガイドマップでは、彼の偉業を後生に受け継ぐために市内各地で進められている童謡の里づくりをあますところなく紹介しています。また、弘田龍太郎をモデルにしたイメージキャラクター「りゅうたろうくん」も登場しています。ガイドマップの入手ご希望の方は、国土交通省土佐国道事務所調査第二課・安芸市建設課までお問い合わせ下さい。



## 高知県安芸地区でモデルルート決定記念コンサートを開催

高知県安芸地区のモデルルートの決定を記念して、「安芸市歴史と文化にふれる歩くみちづくり懇話会」の主催で県内ボランティアバンド「アドベンチャーズ」による記念コンサートを3月22日(土)に安芸市内原野公園で開催しました。記念コンサートは、安芸地区のルート決定後最初のイベントということもあって「新四国のみち First Step コンサート By 『アドベンチャーズ』」と名付けられました。

コンサートの冒頭に、懇話会の大坪会長が「童謡を口ずさみながらルートを散策し、安芸の歴史や文化に触れて心に安らぎを感じてもらえたら」と挨拶。地元のつつじの丘老人ホーム等の福祉関係の方々や、地元内外から約150人がかけつけ、安芸市出身の作曲家「弘田龍太郎」の童謡メドレーを含む懐かしい名曲に耳を傾けていました。

また、コンサート終了後、安芸市観光協会主催の「弥太郎太鼓」「もち投げ」が実施され、参加者には「『みちくさ』を楽しもう 散策ルートガイドマップ」や弘田龍太郎作曲童謡歌詞入りシールなどが配布されました。



## JR四国が野市町で日帰りの旅「野開きの道ウォーキング」を企画

高知県野市町西野・大谷地区の「野開きのみち」は、土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線「のいち駅」が出发点。鉄道を使って日帰りで散策が楽しめます。

この度、JR四国主催の「春満喫日帰りの旅」として、「高知・野市町の野開きの道ウォーキング」が企画されました。4～6月に実施される予定です。今回はJR四国の企画ですが、のいち駅からの案内には地区の懇話会である「野開きのみちを育てる会」の方々も協力することになっています。

鉄道で気軽に行ける場所という条件はありますが、訪れる人にとっても魅力的な空間があって、地区の協力体制がしっかりしていれば、このようなウォーキングもどんどん企画されるものと思います。

なお、地区主催のイベントをJR四国にも協力いただいて実施した例もあります(四国のみちハイキング日和佐大会：平成14年11月)。このような企画をお考えの地区があれば、新四国のみち事務局(四国地方整備局 道路部 地域道路課 Tel087-851-8061(代表))までご相談ください。



## 新四国のみち認定地区からも「四国のみずべ八十八カ所」が選ばれました

四国のみずべ八十八カ所とは、四国地方整備局の提唱により後世に残したい川や海岸、渓谷、滝などを公募により八十八カ所選定したものです。

新四国のみち認定地区からも以下の4箇所が選定されました。地域で守り育てる水辺と、それらを歩いて巡る新四国のみちの取組を一体的に進め、より魅力ある地域づくりを地域住民の手で進めていくことが期待されます。

- ・西条アクアトピア(西条地区)
- ・大洲を流れる肱川(肱南地区)
- ・兼山三又のみずべ(西野大谷地区)
- ・柏島(柏島地区)



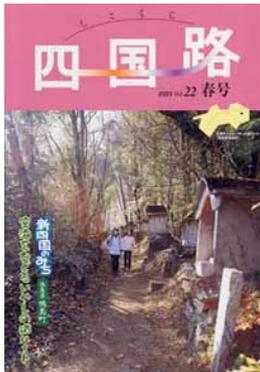
(写真)西条アクアトピア

## 「四国路」春号で徳島県鴨島地区を紹介

「四国の道路を考える会」発行の「四国路」2003年春号で、徳島県鴨島地区の取組を紹介しています。鴨島地区は「空海をたどるいやしの道」と呼ばれるへんろ道です。

「四国路」では新四国のみちを毎号1地区ずつ紹介しており、鴨島地区が7地区目の紹介となります。今後も各地区の取組を順番に取り上げていく予定です。「四国路」2003年春号は四国地方整備局のホームページでもご覧になれます。

なお、鴨島地区の取組の中で毎年5月にウォーキングイベントを実施していることが紹介されていますが、次回は5月18日(日)に「第4回四国三郎をまたぐ空海の道ウォーク」「第9回最後まで残った空海の道ウォーク」がそれぞれ開催されます。



「四国路」2003年春号アドレス

<http://www.skr.mlit.go.jp/koho/shikokuji/shikokuji.html>

## 「新四国のみちサミット」の議事録パンフレットができました

平成14年11月28日(木)、高知県野市町内で開催した「新四国のみちサミット」の議事録ができあがりました。既に各地区には配布してありますが、新たに入手ご希望の方は、新四国のみち事務局(四国地方整備局 道路部 地域道路課 Tel087-851-8061(代表))までお問い合わせ下さい。



## ～ 編集後記 ～

新四国のみちの取組は、従前の四国のみち事業と紛らわしい等の指摘がある一方で、取組をわかりやすく説明するツールがありませんでした。このため、事務局では新四国のみちを紹介するビデオの作成と、新四国のみちパンフレットの更新をそれぞれ進めています。

今回のビデオ・パンフレットは各地区の具体的な取組を盛り込んだ内容としており、新四国のみちに興味のある市町村や一般の方にわかりやすく紹介できるだけでなく、既に認定されている地区にとっても参考資料として取組の活性化につながるものと考えています。

新年度早々に配布できるよう作業中です。ご期待ください。(黒木)

本年度を振り返ってみると、この「新四国のみちニュース」を創刊したり、秋には野市町で「新四国のみちサミット」を開催するなど、地道な情報交換を進めた1年だったと思います。13地区それぞれの特色を活かした活動をお互いに情報交換することで、地区で実際に活動されている方々はもちろん、各地区を担当する行政側のメンバーにとっても参考となり、また励みにもなったのではないかと考えています。

これからの四国の道づくりは、四国に住む人にとっても、四国を訪れる人にとっても魅力のある地域づくりを支えるような取組も重要です。新四国のみちは、まさにこれからの四国の道づくりの取組の代表として、積極的に進めていきたいと思えます。

行政機関の宿命で、4月になると人事異動で担当者が一新することがあります。新四国のみちニュースの編集事務局も4月からは別のメンバーが担当することになる予定です。行政側で4月から新しく新四国のみち担当になる人は早く地区の方々と親しくなっただき、地区で活動されている方々も新しい行政側のメンバーとこれまでどおり気軽に接していただくことで、これからの新四国のみちの取組が一層地域にとけ込んだものになっていけばいいと思えます。(花鳥)

### 編集・発行

新四国のみち事務局

四国地方整備局道路部地域道路課 黒木、近藤

TEL 087-851-8061(代表)

HPアドレス：<http://www.skr.mlit.go.jp/road/sinsikok/index.html>

E-Mail：[chiikidouro@skr.mlit.go.jp](mailto:chiikidouro@skr.mlit.go.jp)